

## 現代における布教とは

長谷川 正 徳

(前現代宗教研究所所長・顧問)

今年八月に現宗研を退任しまして、いわば、やや自由な立場を保持できることになりました。私が現宗研で在任した二年有余、北海道から、九州までの教研会議で、いろいろご相談申し上げたことですが、本宗のお題目と、新興宗教のお題目と、どこがどう違うか。まったく宗教なくして結構立派に生きている人もあるのに、どうして宗教が必要なのか、といったテーマを与えられて、是非この話をも思っている話ができなかった。それを今日はお聞き頂いて、ご叱正賜われれば幸いです。

### 一、布教・伝道の六条件

#### 衆生救済の使命・宗教的使命感

一体、布教とは、伝道とは何でしょうか。基本的にここで考えまさんと、総弘通だとか、護法運動とか言っても、観念的・抽象的な舞い上がりを見せてしまうだけだと思います。

おおよそ、宗教で布教伝道を伴わないものはなかった。最も、シャーマニズムとか、アニミズムとか、原始的あるいは民族的な宗教は、殆んど布教伝道はありません。開祖あるいは宗祖、個人の名において説き出された宗教は、い

ずれも激しい布教伝道の歴史がある。布教伝道によって、初めは小さな微々たる、ある地方の一宗派・宗教であったものが、次第に拡大されていって、遂には世界宗教にまで発展していく。この場合、開祖、あるいは宗祖自身が優れた伝道者であったことは言うまでもないが、宗教の歴史においては、一世紀あるいは数世紀も経つてから、一人の傑出した布教者・伝道者が現れることによって、群小の宗教を抑え、我然それが大きくなっていったという場合もあります。

キリスト教は、ご存知の通りパウロにおいて広がっていく。東西本願寺をはじめとする真宗教団は、親鸞ではなくて、蓮如の時代に広まっている。日蓮正宗も、明治四十四〜五年には八〇カ寺に満たなかったが、戸田城聖・池田大作の昭和二十六年あたりから燎原の火の如く広まって、今日では、数百カ寺を数えている。我宗においては、こういう爆発的な教勢はなかったにしても、像師・親師などは、宗祖滅後かなり経っているケースである。これが、私は宗教の布教伝道における一つの特色だと思えます。

しかし、神の啓示を受けたり、仏教的に言つて悟りを開いたからと言つて、それがそのまま直線的に布教伝道につながつたかと言つと、そうでもない。啓示を受けたと言いながら葬り去られてしまった、という例もあるし、悟りを開いたと申しても、一人悟りすまして山林に隠れてしまったという、そういう人もいます。

ですから、布教とか伝道は、ひとつの実践であります。布教伝道という実践に駆り立てるもうひとつのものがある。それは、衆生救済の使命とか、宗教的使命感というものだろうと思う。釈尊が尼蓮禪河のほとりで、豁然として大悟徹底された時、昔、修行した仲間の所へ行かれて、まず語りかけた。あの心境。大乘仏教という菩薩道としての実践が絶対要請されているのです。全ての宗教の布教伝道の根底では、どんな形・姿をとるにしても、この強い宗教的使命感が、まず第一の条件・特色だと思つて。それでなければならぬと私は思います。

## 説得と変容

布教伝道の第二の特色は、説得。説得という手段によつて他の人々の信念や、社会的なあり方・生活態度を変容させる。説得と変容だと思ふ。これを欠いたら布教伝道ではないと思ふ。他の宗教から、自分の宗教に、無宗教から宗教に、人々の信念を変更させること、それが布教の目的でありましょう。それによつて人は、社会的な行動様式まで変わったものになつてくる。変容する。

例えば、仏教が伝来して千年余り、肉食タブー、四つ足を食べない、という日本人の社会風習が明治維新まで続いた。

これについて福沢諭吉が面白い事を書いています。明治維新の文明開化で一番大事な事は、牛鍋を食う事。仏教の戒律によつて、天武天皇が六七五年に殺生肉食を禁じた。以来千二百年続いた、肉食禁忌・タブーの伝統に、今や終止符がうたれて庶民は大いに牛肉を食うべしと。仏教のそういう戒律はあつたけれども、一部の権力者や病人の間では、薬食とスタミナ食として、実は秘かに鳥・獣が食べられていた。もうこれからは遠慮することなく牛鍋をつついて、日本人は大いに欧米化したらいいと書いてますけども、とにかく千二百年間、仏教が日本人の生活変容を行つて来ています。

それから、キリスト教が広まることによつて、一夫多妻であつた種族が一夫一婦にどんどん変わつていった。キリスト教信仰の生活への倫理化が、各地に広まつていった。

このように説得と変容、その説得は、修法によるのもいいでしょう、言説もいいでしょう、靈断もいいでしょう。とにかく相手を変容せしめなければいけない。だから布教伝道は、単なる倫理道德の教説であつてはならないと思ふ。これが第二点。

## 批判・対決

第三番目に、一般に布教伝道というものは、自分の持つている信仰と異質なものに対して、対決し批判する過程でもある。ここにいわゆる護教学と言われるものが、必然的におこってくるのです。自らの信条に対する確信が深ければ深いほど、異質なものに対しては、鋭く批判し対決する。これが布教伝道の特色だと思ふ。

自己以外の信仰への批判・対決が鋭くなればなるほど、また反撃も出て来ます。物理的な暴力を伴ったということも歴史的にはあります。ご存知の通りヨーロッパに見られた十字軍、第一次十字軍は一〇九六年、第七次が一二七〇年ですから一七〇〇〜一八〇〇年間、宗教の名において戦争が行われた。今日、イラン・イラクの戦いの中には他のモメントもあるが、イスラムにおける宗教的な契機が非常に強いと思われる。仏教圏においては、仏教のセクトの争いが物理的暴力にまで発展したという歴史が殆ど見られない。最近の昭和二十七〜八年から三十五〜六年へかけての池田大作が自己批判するまでの創価学会の折伏には、一種の物理的な暴力も彼等はあえてしたようでもあります。要するに布教伝道とは、異質の信仰に対しては、容赦なくこれらと対決し批判するプロセスであります。

## 組織化の過程

布教伝道の過程は、同時に組織化の過程でなければならないと思ふ。

布教によって、信者がひとつの信仰の旗の基に集って参ります。それはひとつの社会的力であり、その社会的な力を、最も有効なものにするかしないかは、組織化の程度にかかっていると言える。

マックス・ウェーバーが、どうしてインドで仏教が滅びてしまったかについて論文を書いています。インドにおける仏教滅亡の原因は、仏教の組織が、回教の侵入に対して余りにも弱すぎたということによります。仏教に組織がなかった。また、専門的僧職者と、信者集団とが切り離されて、信者は放置されたまま、その有効な組織化が全然行わ

れていなかっただからであると言う。

聞くべき言葉だと思えます。専門的僧職者と信者集団とが切断されたまま、有効な組織化が行われていなかった。イスラムの侵入に対して全く無力であった。これが仏教がインドで滅びた原因であると、指摘している。

私事で恐縮ですが、昭和四十六年一月、渡部第一次内局で伝道部長として入局しました。その時に、まず組織化です。それには、少なくとも一定の教科書によって信者を教育、あるいは再教育して、同時に組織化をやらなくてはならないということになった。これが統一信行と名付けられた。そして教科書を作って四年間やってみた。しかし、既成教団がつけている歴史的な、悪く言えばアカ、良く言えば伝統、そういうものが重しになって、新中間層へ伸びて行こうという努力がみごとに挫折した。というのが私のいつわりのない実感です。統一信行で信者の意識を統一して、組織を作ると考えた。これは今日においても重要な課題です。布教伝道の過程は、組織化の過程であるということでもあります。

### 社会的・歴史的責任

次に、非常に大事なことだと思えますが、私共の宗教が集団を形成して、その限りでは今言ったようにひとつの社会的力、ソシアルパワーとして社会の中に存在している。社会は歴史であります。従って我々の布教伝道は、社会的、歴史的な責任を持つものだという事です。

靖国問題に対しては、明快な見解と認識と態度を持たなければならない。実践をも含めて、立正平和は単なる観念論ではない。核爆弾に対しても我々は、明確な認識と実践に裏付けられた再認識がなければならない。これが歴史に對する責任という事なんです。

あるいは今、日蓮宗がターゲットになっっている同和問題。社会運動としての同和運動には、三つの大きな流れがあ

る。社会党・公明党・民社党につながる解同、共産党につながっていると云われる全解連、自民党につながる全日同。この中のある団体では、法華経は差別經典であるという。この典型的な箇所は、安樂行品の「親近することなかれ」とある中に、賤であると言っている。差別用語が至る所に出てくる。譬喩品を読んでもそうだ。あるいは最後の勸発品「親近其人 及諸患者 若屠兒 若畜猪羊鷄狗 若獵師 若衛売女色」ひどい差別的表現である。というような手で何とか云えと迫って来ています。また、墓地の問題で差別戒名がある。今のところ、全然ないと言い切るわけにはいきません、各教団と較べれば殆んどないと言っている。

こういう事に対しても、私共は決して布教伝道の中において、無関心であつては断じてならない。明確な認識と、その認識から生まれる我々自身の同和への実践を、それぞれが自覚しなければいけない。これは歴史への責任であります。

果たしてお題目総弘通運動が、こういう社会的・歴史的な現実と十分かみ合っているかどうか、自己批判を持たなければならぬ。ただ、「一切衆生悉有仏性」「山川草木悉皆成仏」、法華経は「二乗作仏」であつて平等。同和問題においては、それでは駄目です。平和の問題も同様であります。もつと歴史的現実というものを深めていくこと。これを私は言いたいのであります。

### 社会科学的分析

我々は、他の教団に対して鋭く批判し、自分自身の宗教としての命運を切り開いて行くのであります。同時に、社会の歴史をどの方向に進めるかという指針を用意しなければならぬ。社会的力としての集団。真に歴史の方向にピッタリ合つておる時、我々の批判は革新に結びついてゆく。歴史の方向に向いている時に、その布教は時代の尖兵となることができる。従つて、我々現代における布教者・伝道者は、社会科学的知识をも必要とします。

例えば、我々は、旧中間層に結びついでいるでしょう。マルクスの言った旧中間層。まだ資本主義的な階級分解が行われていない農民とか、先祖代々米屋をやっている、呉服屋をやっている、こういう旧中間層。土地に定着してきますから、家の觀念が非常に強い。仏壇を中心として、祖先の祭祀に結びついでいる。

ところが、人口の七割は新中間層です。大都市及び大都市周辺にどんどん集まりつつある。そして現代の苦惱を集約的に背負っている。この新中間層をねらっていったのが創価学会や新新宗教。「あなた幸せになりたくないの?」「先祖の供養は檀那寺にしてもらいなさいよ。我々は葬式は行いません。貴方を幸せにするために、この信仰へお入りなさい」こういう形でしょ。家・祖先の祭祀・追善供養に大きく結びついでいった旧中間層が、力を失って来るのは、どうにも仕様がなない。

こういう社会科学的分析も、我々は持たなければならぬ。新中間層をとらえるということが、今後の総弘通運動の眼目でなければならぬと思うんです。

そして、こういう社会科学や社会問題に対して、無知であつてはいけぬ。しかし、私の言いたい事は、無知でなくとも、その理解において重大な誤解をおかしている場合があるということです。

例えばマルクス主義と聞き、共産主義と聞くと、「それはアカである」と。ここには悪法と言われた治安維持法時代の觀念が残っている。軍国主義時代の治安維持法的な理解しかマルキシズムに示さない教団人が、未だに現にあるということ、これは、無知でなくとも誤解であります。

その結果、仏教や教団が国家や権力の前に力が弱く、安易に国家や権力になびいてしまう。例えば、日蓮聖人の如く、真理の光、妙法蓮華經をかざして権力を指導すると申したらんには、正道の法と化し、権力を指導し、権力に抵抗するのでなく、逆に権力に利用されたり、その精神的、道德的支柱になり下がってしまったりするような経験がある。過去にあったということを、我々伝道者は夢寐にも忘れてはならない。これは私自身をも含めての自己批判であ

ります。戦争中、「立正安国」の「安国」さえやめて「奉国」といった。献納した飛行機は、立正安国号でなく立正奉国号だった。そして国守豊穰だった。主客の読み違えを敢えてしている。やはり、戦争はどうしておこるか、平和はどうしたら守ることができるかということと、宗教的視点からだけでなく、社会科学的な知識をも持たなければならぬ。それでないと善意の過失を犯してしまうと、私は思うのであります。

さて、以上の六つをあげました。この六つが今、私の考えておる布教伝道の特色であり条件であります。これは、宗教・宗派によって多少の違いはありますが、宗教史の中で繰り返されて来ていることなのです。

## 二、現在への検証と総弘通運動のあり方

### 創価学会の場合

今は第三次の宗教ブームと言われ、新新宗教の時代と言われている。こういうものが一体、この六つの原則に添っているかどうか、それを調べることによって、新宗教、新新宗教の性格の一端を知ることができると思うのであります。同時に、我々既成教団は、果たしてこの宗教的、あるいは布教伝道の諸条件を備えているかどうか、自己反省することによって、現代及び将来の運命を予知する事ができると思う。

創価学会の爆発的な広がりには、まず第一に、執拗に繰り返された説得と変容です。そうでしょう。しまいには仏壇まで焼かせた、位牌まで壊させて、変容させてしまった。いいか悪いかは別として。それから、組織的動員。入信と同時に縦・横線の中へ組織化している。そこに、動員力を有効に用いた演出があつた。オリンピックのあの会場を十万人で埋めたことがある。また、聖教新聞でご存知の通り絶えず動員を繰り返した。極めて巧みな演出によって参加する信者を、心理的に自己肥大化を遂げさせておる。それから、座談会・学習会をしきりに行うことによる教学学習運動。マスコミュニケーションによるコンセンサスを図るといったこと。布教伝道の諸条件をとにかく満しております。



す。果たして、我々の教団はどうかという事であります。

### 第三次宗教ブーム

第一次宗教ブームは、明治維新。いわゆる廃仏棄釈という形で、国家神道あるいは共和神道が伸びた。第二次宗教ブームは、昭和二十年の敗戦前後を契機とした、法華系題目教団である、靈友会をはじめ立正佼成会・仏所護念会・妙道会・妙智会等々で、神力品の上行所伝を欠いた誤りの新興宗教のあり方でした。

最近、第三次宗教ブームと言ってますけれど、いわばオカルト的であります。それから桐山靖雄氏の密教ブーム。わずかに既成教団では禪ブームが見られます。

さて、こういうものが布教伝道の諸条件に合っているかないか、ためしてみたいと思います。

今は、オカルトブーム、神秘ブーム、密教ブーム、既成的なものは禪ブーム、アニミズム的なものであり、フェティシズム・事物崇拜。創価学会の本尊の崇拜はフェティシズムの最たる物だと思ふ。あるいはシャーマニズム、ある学者は宗教回帰現象だと云う。そうかも知れません。

現世利益への願望が、非常に強い。宗教を求める心の中に、うまく当たれば幸い、当たらなくても元々だという、射幸的な心、物珍らしさに対する遊び的な傾向が感じられる。さまざま宗教事象に、次から次へとかかわって歩いていく。宗教放浪主義者。「あれもやってみました、これもやってみました」と、自慢気に話す傾向。宗教がどんどん個人化している。ある学者は、今は宗教のプライベートイゼイション、私化の時代だと言っています。そんな気がしてならない。

これは、どうにもならない管理社会の中へ閉じ込められた現代の日本人が、せめても自分自身の内面、自分の心の中に平安と充足を求めようという、現代的な状況が生み出した宗教への傾向ではないかと思ふ。

去年、和歌山で教祖の後を追って七人が自殺しました。この間、朝鮮で、会社の社長をしている女性が、一家眷族どころか従業員まで道連れにして三十二人死んで行った。プライベイトイゼイション。社会や歴史に対して全然目を開こうとしない。だから線香花火みたいに、教祖が死ねば、それで依り所を失ってしまう。こういう背景が、我々のお題目総弘通運動の後にあるということを、見失ってはいけないと私は言っているんです。

### オカルトブーム

オカルト、ご存知のように、オカルトというのは、隠すという意味でしょう。おおい隠す。これは大学紛争があったのが一九七〇年代の終わり頃、あの頃に一時バツと世界的な流行になりました。そして日本では小さな子が、念力でスプーンをキューツと曲げたり、そんなのがテレビで映された。それから間もなく、あのオカルトブームは消えましたが、最近また出て来てます。

例えば、私は見たことがありませんが、ホラー・恐怖映画。これが名古屋駅前の某映画館でありますと、十重二十重に中学生や高校生が取り巻いています。それから、オカルト月刊雑誌「ムー」というのがある。時々本屋で見ると、けですが、資料によりますと、発行部数が公表三十五万部だと言われています。この妙なオカルト雑誌が三十五万部、三十五万部売れる宗教誌なんて他にありません。「大白蓮華」は七十万部位出ています。これは創価学会の教学試験の教材になり、教学をやる人たちは読みますから、七十万から八十万になる。それ以外にない。酒井謙佑さんが一生懸命になってやっている「ナーム」。これが、三、四万が限界。「正法」が十万を目標に狙ったんですが、とてもいかない。今の「正法」の発行部数が、各教団の中では、トップです。他の宗派にはない。それが現況です。それに対して、このオカルト雑誌が三十五万、なんと七割近くが、中学生・高校生の読者。あとの三割が大学生と成人。全くオカルト時代です。いいですか、これは、神秘的なもの、超自然的なものを、疑いもしないで面白半分信じ込もうとして

いる傾向。非常に健康ではないです。それから、「トワイライトゾーン」というオカルト誌がある。これは、昭和五十八年に創刊されましたが、十萬部売れたそうです。どんどん増えて、昭和六十一年は、十五萬部に増え、まだ増えつづけている。このような状況であります。そして、中学生・高校生はUFOを信じ、宇宙人の実在を確信しています。妖怪変化のたぐい・透視・予言・魔術、そういうものを信じている。

こういう趣向・インテントというのは、どう理解したらいいでしょうか。私は中学生や高校生がオカルト雑誌にとびついて読むのは、ひとつの遊びのファッションだと思う。ファッションな遊びだという一面がある。同時に私は、今の子供達を見てみると受験・就職、かわいそうな状態。いわゆる競争社会の重圧の中に置かれている。彼等は、そういう競争社会の重圧から自由な感性が欲しいのではないのでしょうか。遊びのファッションであると同時に、受験競争・就職競争という重圧から逃れて、自由な感性を回復しようとする、人間的衝動の表れがオカルトへ向かっている。これも健全なあり方ではないと思う。

### 三、総弘通運動への展望

こういう新新宗教を見て参りますと、私が述べた布教伝道の六つの条件が、ひとつもかかっていない。やがて滅びて行く。しかし、ある意味においては、宗教にインタレストを持った人ですから、こういうものをつかまえていく。引き入れていく。この努力は、まさに総弘通運動における未信徒への働きかけではあるまいか、と思うのであります。布教伝道とは何であるか、六つの条件・特色を挙げました。良かれ悪しかれこの条件を満たした宗教は大きくなっています。広がっています。それを満たさないものは、やがて、うたかたのごとく滅びて行くようです。そういう冷徹な認識を持って、私共は我々の総弘通運動を、具体的に展開していかなければならない。これが私の申し上げたかったことでございます。